

月刊 ウィーン

GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊34年目 **Nr. 401**

2023年6月号



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都

134

原子力規制委員会は五月十日の定例会合で、二〇二三年一月に行われた福島第一原子力発電所のALPS処理水（トリチウム以外の核種について環境放出の規制基準を満たす水）取扱いに関するIAEA（国際原子力機関、本部：ウィーン）規制レビュー（ミッション団長ルグスタヴォ・カルソニアIEA原子力安全・核セキュリティ局調整官）の報告書について原子力規制庁より説明を受けた。

同報告書は、ALPS処理水の海洋放出に関し、二〇二二年七月に日本政府がIAEAによる支援を要請し署名した付託事項に基づき行われたレビューのうち、規制面でのレビューについて取りまとめたもの。一月のIAEAによる規制レビューは二〇二二年三月に続き二回目となり、規制委員会へのヒアリングや現地視察を終了後、団長のカルソニアは、「前回のミッションで出たほとんどの問題について考慮されていることを確認できた」と日本の規制当局の取組を評価した上で、三ヶ月以内にも報告書を公表するとしていた。

今回、IAEAが公表した報告書では、政府の役割と責任、主要概念と安全目的、認可プロセスなど、規制に係る五つの技術的事項に関するレビューについて記載。進捗報告書との位置付けで、結論には言及しておらず、「ALPS処理水の海洋放出開始まで、および放出開始後において、国際安全基準に照らし規制プロセスとその活動を引き続き監視する」としている。

IAEAはレビュー全側面にわたる包括的報告書を年央にも公表することとしているが、原子力規制庁担当者によると、これに向けたミッションが五月末にも来日する予定。日本政府は海洋放出開始時期を春から夏頃と見込んでいます。

この他、十日の定例会合では、東京電力が昨秋に申請した福島第一原子力発電所廃炉に関する実施計画の変更認可が決定された。ALPS処理水の海洋放出に当たり、トリチウム以外に測定・評価を行う



「トンネル掘進完了後の放水トンネルの様子 ©東京電力」
https://www.jaif.or.jp/journal/japan/17716.html

対象核種として二九核種を選定し、放出基準を満たすことを確認するとしたもの。ALPS処理水の希釈放出設備の設置工事は、四月二十六日に全長約一〇三mの放水トンネルの掘進が完了している。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市に関係する偉大な作家（その二）を紹介したい。一八七四年にウィーンの富裕な商家に生まれたフリーゴ・フォン・ホーフマンスタールは、元々ユダヤ系の家系であったが、ユダヤ、イタリア、ドイツの血が流れていた。小学校には一度も通わず、幼年期から家庭教師がついてヨーロッパの古典文学を学んだ。ギムナジウム時代から詩作を始め、十六歳の頃より戯曲や随筆を発表し文壇を驚かせた。九二年、ウィーン大学に入学して法律を学んだが、後にロマンシュ諸語の詩法の研究に転じた。ホーフマンスタールは、象徴主義的で唯美主義的な詩作者であり、精妙な随筆を書くエッセイストでもあり、美しい韻文劇の書き手でもあった。詩論をなし、古典古代の悲劇や中世の伝説を翻案して現代性を付与するなど、その活躍は多方面にわたった。二七歳のときに、世紀転換点における芸術家の精神的な危機を架空の手紙の形で記した『チャンドロス卿の手紙』を発表。近代批評の先駆的作品となった。これ以降、祝祭としての演劇を唱え、ソフォクレスなどの古典劇に洗練された美意識に基づき近代的解釈を加え、優れた翻案・改作の数々を発表した。代表作は中世宗教劇の『イエーターマン』。一九二〇年に開催されたザルツブルク音楽祭の発起人の一人としても知られる。リヒャルト・シュトラウスと協力して『薔薇の騎士』などのオペラ創作も手がけた。社会や政治に対しては終始一定の距離をとる姿勢を貫いた。また、生涯を通じて熱烈な愛国者でもあった。第一次世界大戦のオーストリアハンガリー帝国崩壊に大きな精神的ショックを受け、晩年は過去の文化や伝統に結びついた文化

評論や書物の編集に励んだ。

一方、一九〇七年に北海道上川郡旭川町（現：旭川市）に軍医の長男として生まれた井上靖は、静岡県立浜松中学校（現：浜松北高等学校）に首席で入学。二七年に石川県金沢市の第四高等学校（現：金

沢大学）に入学、柔道部に入部も二九年には退部して文学活動を本格化。三〇年には第四高等学校を卒業、北陸四県の詩人による雑誌『日本海詩人』に投稿。詩作活動に入るとともに、九州帝国大学法学部英文科入学。三二年には九州帝大中退、京都帝国大学文学部哲学科入学。三六年に京都帝大卒業、サンデー毎日の懸賞小説に入選し、これが縁で毎日新聞大阪本社へ入社、学芸部に配属。戦後は学芸部副部長を務め、囲碁の本因坊戦や将棋の名人戦の運営にも関わる。五〇年、『闘牛』で芥川賞を受賞。私小説・心境小説が主流だった敗戦後の日本文学に物語性を回復させ、昭和文学の方向性を大きく変えた戦後期を代表する作家の一人。劣等感から来る孤独と人間の無常を、時間と空間を通じた舞台と詩情あふれる文体・表現によって多彩な物語のなかに描き、高い評価を得た。五〇年代は、いわゆる中間小説とよばれた恋愛・社会小説を中心に書いたが、徐々にその作風を広げ、六〇年代以降は、中央アジアを舞台とした西域ものと呼ばれる歴史小説、幼少期以降の自己の境遇を基にした自伝的小説、敗戦後の日本高度成長と科学偏重の現代を憂う風刺小説、老いと死生観を主題とした心理小説・私小説など、幅広い作品を手掛けた。また海外旅行が一般的でない昭和期に、欧米の大都市からソ連、中央アジア・中東の秘境まで数々の地を何度も旅し、それを基にした紀行文や各地の美術評論なども多い。七六年には文化勲章を受章した。

余談であるが、ホーフマンスタールの作品は読む機会がなかったが、オペラ『薔薇の騎士』はウィーン国立歌劇場などで何度か観た。井上靖は『氷壁』『天

平の薔』、『敦煌』など結構読んで感動した。今月も両市に関連する偉大な作家を紹介することができた幸運に感謝しつつ、ホーフマンスタールの写真を掲載させていただきます。

■ 杉本純 元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長



謝しつつ、ホーフマンスタールの写真を掲載させていただきます。



ウィーン8区にあるヨーゼフシュタット劇場のファサードにつけられた記念碑



ウィーン3区にある記念碑

